

協議の実際

間瀬茂夫

一 はじめに

本学会研究協議においては、昨年度から「読むこと」の領域がシリーズで問題化されることとなった。そこには、近年の学力低下の議論、なかでも国際的な学力調査において「読解力」の結果が振るわなかったことに対する社会的関心の高まりが一つの背景としてある。二〇〇五年度協議における「読解力」概念のとらえ直しもふまへながら、昨年度は小説教材とりわけ新教材の取り扱いに焦点をしばって議論を行った。

今年度は、「読むこと」の領域の中でも説明的文章教材の学習指導を取り上げることとなった。ジャンル特定以上の特別な課題の焦点化は行わなかった。発表は、次の三氏にお願いした。

- ・黒瀬直美氏（広島大学附属中・高等学校）
 - ・重永和馬氏（広島大学附属福山中・高等学校）
 - ・矢原豊祥氏（広島県広島中・高等学校）
- どなたも転任あるいは配属替えの初年度であったにもかかわらず、

発表をお引き受けくださり、本誌にも改めて協議をふまえた実践報告をお寄せいただいた。本稿は、そうした三氏の実践をもとにした今回の研究協議会について、当日（二〇〇八年八月二日）の進行役を務めた者として若干のまとめを行うものである。

二 三氏の実践報告の特徴と問題意識

1 黒瀬氏の場合

黒瀬氏の実践報告は、内山節「自然と人間の関係を通して考える」を中心教材とした単元についてのものである。評論の授業としての特徴は、次のような点にあると思われる。

- ・最後に意見文を書かせることを見通して授業を進めている点。
- ・そのために、導入段階で、アルビン・トフラーの「第三の波」について、教師が口頭の説明によって概要を説明し、聞かせている点。
- ・教材について、丹念な読み取りを行っている点。
- ・読解の後、意見文を書かせる段階で、教師が口頭で紹介したト

フラーの近代化に対する考え方と、読解を行った内山節の考えとを対比し、どちらの立場に立つかという問いによって課題を設定している点。

一方で、実践報告という観点から見た場合、次のような点に特徴がある。

- ・ 学習者の実態や特徴をとらえ、意味づけようとしている点。
 - ・ 他の授業者の実践と比較している点。
- なお、他の授業者の実践は、次のような点に特徴のあるものであった。

- ・ 教材の後半で中心的に述べられる「時間」という問題を取り上げ、再定義と図示という形で表現させている点。
- ・ 読前の考えの表現、筆者の考えと自分の考えとの比較、読解、同一筆者による発展教材（「武蔵野の風景」学校図書・中三）の続け読み、要約という展開で行われている点。

2 重永氏の場合

重永氏の実践報告は、野元菊夫「言語は色眼鏡である」と丸山圭三郎「言語と記号」とで教材編成を行った単元についてのものである。評論の授業としての特徴は次のような点に認められる。

- ・ 学習者に、既有知識とは異なる見方や考え方と対峙させるため、複数（二つ）の教材で単元を構成している点。具体的には、丸山圭三郎「言語と記号」によって、名付けによる世界の分節化という言語のはたらきを提示している。
- ・ 指導過程が、次のようにモデル的とも言える丁寧な展開で構成

されている点。

読前における学習者のテーマに対する考えの表現と交流

主教材の文章読解

読後の感想文と交流（紹介）

副教材の読解と比較

読後の意見文の記述と交流

アンケートによる学習の成果のふりかえり

- ・ 表現について、読前、一つめの教材の読後、二つめの教材の読後と機会が十分に設定されている点。
- ・ 学習者の書いた作文について、教師が分類を行い、考え方や立場の違いを明確にしながら、学習者に提示している点。

評論教材に対する授業観がはっきり示されていて、実践報告としても明確な構想を持つ。

3 矢原氏の場合

矢原氏の実践報告は、鈴木孝夫「ものとことば」を扱った単元の、昨年度と今年度という二か年に渡る授業改善の過程を提示するものである。評論の授業としての特徴は、次のような点に見られる。

- ・ 両年度の実践において、評論文の表現に対する「評価読み」の実現を目指している点。
- ・ 論理の展開をとらえさせるため、段落の順序をばらばらにして教材を提示している点。
- ・ 学習課題の解決を、個人学習→グループ活動→全体協議という展開で行っている点。

・教材について、丹念な読み取りを行っている点。

・二〇〇八年度の実践において、「評価読み」を実現する手立として、第三段落の例示とまとめの関係を焦点化し、読後に意見文を書かせるということによって授業改善を行っている点。

実践報告の特徴としては、先に述べた授業改善の過程が示されている点がまず挙げられるが、他にも、複数の教科書会社の教材のあり様を比較するなど、「評価読み」のための教材分析が示されている点が挙げられる。

4 評論の授業における授業者の問題意識

三氏の実践報告からは、現在評論の授業に際して授業者が共有する問題意識がいくつか浮かび上がってくるように思われる。授業展開の順に挙げてみたい。

一つ目に、評論教材と学習者の既有知識や問題意識とをいかに結ぶかということである。これは、教材を読む前に作文を書かせるという学習活動として、詳しくはそこの作文課題のあり方、教師の語りかけという教授行為として現れる。

二つ目に、評論教材における論理の展開をいかに確実にとらえさせるかということである。例えば段落の並べ替えというように学習活動が工夫されることもあれば、導入に続く展開部での発問と板書というオーソドックスな形でおさえられることもある。要約文を書かせるという方法も見られる。

三つ目に、筆者の認識内容や論展開を含めた文章表現をいかに相対的にとらえさせるかということである。対比的な内容を持つ教材

や、類似教材、同一の筆者の教材をあわせて読むことで実現されることが多いが、一方で「評価読み」「批判的読み」という読みの構えを持たせることで行われることもある。

四つ目に、読後において学習者の認識の変容や問題意識の発展をいかに学習者自身に意識づけるかということである。これは、筆者の考えに対する自分の立場を明確にした作文を書かせるという形で行われることが多い。ときにはダイベートなどへの展開も見られる。五つ目に、以上全てに関わって、評論あるいは国語科の授業全体の活性化をいかに行うかということである。作文を書かせること、またそれを読み会い交流することについても、そうした側面から再び位置づけることができる。話し合いやグループ活動の導入なども行われる。

三 協議の実際

1 学習者が評論を読むことを通して学ぶもの

当日の協議では、以上のような実践報告を元にさらなる探究がなされた。前項の問題意識と重なる部分もあるが、いくつかの論点をとりあげて紹介したい。

まず問題となったのは、評論を読むことを通して学習者は何を学ぶのか、学ばせるべきなのかということである。このことについて次のような発言が見られた。

・ある問題やテーマについて、どういう問いを立てるのか。問いの立て方や、問題意識を持つということを身につけさせる。

・ 評論の内容は時代によっても変わってくる。だから、そこに表現された筆者の思考方法を身につけさせる必要があるのではないか。

・ 文章を読むことや読書をすることで生徒が手に入れるのは、内容にとどまらない。思考のフレームのようなものではないか。生徒の見方を変えるようなものを読ませると、書くときにもそうした思考の方法へと焦点が当たりやすい。

・ 予備校や受験指導の中で、具体例をのぞいて読むという評論の読み方が身につけられることがあるが、それは本来の学力ではないのではないか。

こうしたことについて、重永氏は、評論の学習と意見文を「書くこと」の学習との関連指導の必要性について言及された。また、黒瀬氏は、前任校での実践で、山崎正和「水の東西」を読んだ後、「○の東西」というテーマで作文を書かせたところ、筆者に倣った様々なものの「東西」を対比的にとらえる思考が現れたという経験を披露されるとともに、他の教材では認識の内容が難解で、思考や認識の方法を取り出すことが難しいという発言をなさった。矢原氏からは、中高一貫校として独自に取り組んでいる「ことばの教育」のカリキュラムや、主張文、弁論大会などの学習とのつながりで、そこで身につけた論展開という観点で評論を読むことへの生徒の意識の高まりが感じられるという発言をいただいた。

2 学習者と評論との結びつき

このような議論の中で、評論と学習者の内面や生活、状況との結

びつきを問題とする発言も多数出された。

・ 実践報告の中の生徒の作文には、抽象的な思考、高度な論理も見られるが、具体例が少ない。

・ 具体例の問題は、生徒にとってそのことがどれだけリアリティがあるかということの問題である。

・ 重永実践において、生徒の読前の考えに見られる、ことばをコミュニケーションの道具とみなす考え方は、現実生活において生徒が引き起こしているコミュニケーションの問題と結びついている可能性があるのではないか。中には、ことばを道具とみなす考え方に疑問を呈しているものも見られ、こうしたものが評論と生徒を深い部分で結びつけるきっかけになるのではないか。

3 書くことを通した交流・伝え合い

これら二つの課題へのアプローチの手がかりとして、書くことの可能性、必要性は、参加者の共有するところであった。

・ 生徒同士の意見を交流することによって、問うことが育つ。そのためには、書いたものを読み合うだけでなく、もう一度書くことが必要ではないか。※井上雅彦『伝え合いを重視した高等学校国語科カリキュラムの実践的研究』（溪水社、二〇〇八年）に言及しながらの発言。

・ 意見交流のためのツールの開発や活用が必要ではないか。意見の交流を表現能力としてとらえ直す発言も見られた。

・ 生徒の作文には、相手意識がないものも見られる。受け手にど

う伝えるかという意識を持たせる必要がある。

・ 一方で伝えるための技術がある。自分の実践をふりかえると、欠けていた側面である。言語技術の部分が弱かった。

4 評論の授業は何を指すのか

協議会の終盤には、次のような根源的な問いも出された。

・ 評論を読ませることの目標は何か。なぜ難解なものを読まなければならぬのかということの目標を授業の中でどのように設定するか。高等学校になるとたんに抽象的になる。

・ 説明的文章を読ませることについてどういう価値があるのか。どこに最終ゴールを持つていくのか。

三氏は、こうした問いに答える形で、最後のコメントを述べることとなった。黒瀬氏は、評論の授業の目標について、これからの社会をどう生きていくのか、最終ゴールについて、問い続ける人間を育てることだと述べられた。重永氏は、評論を読むことや交流を通して、学習者が見方を更新することが現在のところの目標であるとした。矢原氏は、様々な文章を読んで自分の見方を広げたり深めたりすることを目標としたうえで、今回の協議をふまえて、二学期には筆者の本来にいたかったことは何かという「リアリティ」を追求すること、意見文を書かせることを授業で行いたいとし、先に紹介したように、そうした観点から実際の授業改善の結果を本誌にお示しいただいた。

四 中学校・高等学校における説明的文章の読み の授業の探究

今回の協議会を通して強く感じたのは、一つには、実践報告を通して、日常の説明的文章の授業において様々な工夫がなされているということの実感である。三氏には、本会事務局から間際（七月はじめ）にご発表をお願いすることとなった。そのため、普段の授業をご提案いただいたと思われる。しかし、そうした授業においても、一つの教材を線条的に読んでいくのではなく、複数教材の編成、表現との関連指導および意見交流、教材の与え方など、学習者の認識を引き出し深める、意欲を高める、論理を探究させるといった指導の工夫がなされていたのである。

もう一つには、協議を通して、評論教材の学習の現実性をどう実現するかということの問題の重要性である。学習者の側面の問題として、生徒の生活や問題意識と評論教材の内容や論展開とをどう結ぶかということは、確かに日常的に腐心する授業の工夫だが、さらなる授業改善を実現するうえでポイントとなるようである。協議においては、評論の論点と、それと対応する生徒の経験や関連する知識などの「具体例」とを結びつけて実感的に評論を理解させ、考えさせ、表現させるということが具体的なあり方として提起された。身につけさせる国語学力という側面からも、現実性は求められている。感想等を書くことによつて交流させる際にも、先の具体例の述べ方や相手意識を持つことを身につけさせるべきだという発言は、作文の内容ばかりでなく書き方にも配慮したものであるが、国語の

学習指導の本来的なものであると同時に、PISAの調査や言語技術の教育という社会的な関心や要請に応えるものと思われる。こうした観点からは、今回の協議で扱うことができなかった、中学校の説明的文章教材との関連、あるいは一年間のカリキュラムの編成とその中でのそれぞれの説明的文章教材の位置ということも検討する必要があるだろう。

中学校・高等学校における説明的文章教材、中でも評論の読みの授業では受験指導との関係が必ず問題となる。それが最も影響の大きい現実であるからである。しかし、実際の・社会的な言語能力というもう一方の現実性が顕在化しつつある現在、評論の授業はさらなる探究が求められる。本会および本誌をそのような場とし続けていきたい。

(広島大学)